

ぬ
巨乳格闘娘に
媚薬(2倍の量)を
飲ませてみた結果

基本16枚 前176枚

いん
いん
いん

いん
いん

く
ぱ
あ

く
ね



「ティファ、これ」

ティファがセブンスヘブンの

店じまいを終えた頃に帰宅した俺は、

来る途中に手に入れた青い瓶を

ぶっきらぼうに手渡した。

「あ、クラウドお帰り……ん？」

これポーシヨン？なんだか、

見たこと無い瓶なような気がするけど……」

ティファは、クラウドが贈り物なんて珍しい「ギフト」もあるものね、と笑った。

そして礼を言っでポーシヨンを受け取り、じろじろと観察した。



ティファアが見たことが無いのもそのはずだ。

これはただのポーションではなくて、

ラブポーション、つまり媚薬なのだから。

市場に出回っているものではない。

「いや、疲れてるかと思って買って来たんだよ。

普通のポーションよりこっちの方が

効くんじやないかって」

曖昧に返事をして、ティファアを急かした。

あまり怪しまれても困る。

このポーションに効果があるかどうかは
分からないが、やはり少し期待してしまっていた。



『ふーん、そつらつものかなあ？』

『くっ、くっ。んっ、んっ...』

『ありがとうね、クラウド』

『ああ』

● ●
ティファはよっぽどのが渴いていたのが、
特に警戒することもなくポーションを
一気に飲み干して微笑んだ。
一時間で二回分と書かれていたが、
まあいいだろう。



「ん？クラウド……？」

「はあ、はあ、ちよつと「ニ」「ニ」厚くない？」

「あーつと、仕事で疲れたせいじゃないか？」

そしてすぐに顔を火照らせ始めたティファに
俺は考えるフリをして適当に答えた。



『やっぱりなんかおかしいよお、熱いの……
クラウドお……』

ティファは必死に息を整えようと
しているが、あの量の媚薬を
一気に飲めば
いくらティファでもまともで
いらられるわけがない。

ん……♡

ドクドクドクドク



床にへたりこんだティファは、その豊満な身体に汗を滲ませて悶えていた。

『はあっ、はあっ、ぶっ、ぶっ、はあ……っ』

もじもじ

ん……♡

ん……♡



「なにこれえ……、身体が……アソコが熱い……ッ。
クラウドが目の前にいるのに……」
俺は混乱しているティファを見下ろしながら
あの薬は本物だったと確信した。

ん……♡

キレ

ドキドキドキ



『クラウドお……っ、もしかして、IIのポーシモンのかさか』
助けを求めるようなその上目遣いに、興奮せずには
いられない。

もうティファの身体は刺激が欲しくて堪らない頃だるっ。

『んっっ、はっっっ、はあっ、はあっ』

ティファは無意識のうち、
むっちりとした自身の太腿を
もじもじと摺り寄せていた。

「カンがいいな、ティファは。そう、そのポーシモンは
媚薬だ」



『んっ、媚薬?!なんでっ、「んな」とおっ
んっ、はあっ、』

悩ましげな声をあげて、ティファが恨めしそつに
俺を睨んだ。しかし、紅潮したその表情は
物欲しげにオスを誘う、発情期のメスそのものだ。

「たまには「んっ」いうのもいいだろ?」

俺はティファの頭を撫でてやり、悪意はない「」を示した。

あの奥手なティファに強力な媚薬を飲ませたら

どうなるのか。他意があるとすれば、少しの悪戯心か。

ティファのまだ知らない顔があるなら見てみたいだけだ。



『媚薬なんて、クラウドのいじわるう……。』

身体が熱いよお……。んっ、はあー、はあー』

『んっ、床が冷たくて気持ちいい……。んっ、んっ、んっ』

ティファは我慢できないのか、床にお尻を
スリスリと擦りつけている。
厭らしい腰使いだ。その振動でぶるぶると揺れる胸に
見入っていると、乳首に目が止まる。

ピ
ピ

す
す



ティファは早くも

乳首を勃起させていた。

白のタンクトップの上からも分かるほどに
ピンピンだった。

「ティファ。どこも触ってないのに乳首を
勃たせるなんて、エッチなヤツだな♡」

「ッーそれはクラウドが……ッ」

焦って弁明しようとしても、火照りきった顔では
言い訳にしか聞「ええない。」



「その薬、結構な時間効くみたいだから
覚悟しろよ」

俺のその言葉に、ティファは驚き、
そして諦めたような顔をした。



『馬鹿。はあっ、はあっ、こんなやつ』

我慢できるわけがないの……っ』

弱音を吐くティファ。

ピクッ、ピクッ。



その間も乳首はぷっくらりと膨らみ、
今にもしゅぷりつきたくなる。

「我慢しなくていいんだ、ティファ」
俺はティファに微笑んだ。



するとティファは立ち上がり、俺に抱きついてキスをした。

「んっっっティファ……っ、んう……」
ティファの舌が躊躇もなく、俺の口内に侵入してくる。

くちゅ、くちゅ。

『んっ、クラウドおっ、はあっ、私……っ、んうっ』
貪るようにティファの熱い舌が俺の舌を絡めとって、吸い付いてくる。

くちゅくちゅ。唾液まみれの舌が絡み合う卑猥な音。

わと

むはあー

「むはあっ……ッ、んちゆ、はあっ、んっ」

解放されたかと思えば、またすぐに
口を塞がれる。

離す気はないとでもいっしょに腕が
巻きつけられている。

『んっ、んちゅッ、はああッ、はあんッ』

お互いの口端からは

どちらのものとも分らない

唾液が溢れていく。

わと

むはあ

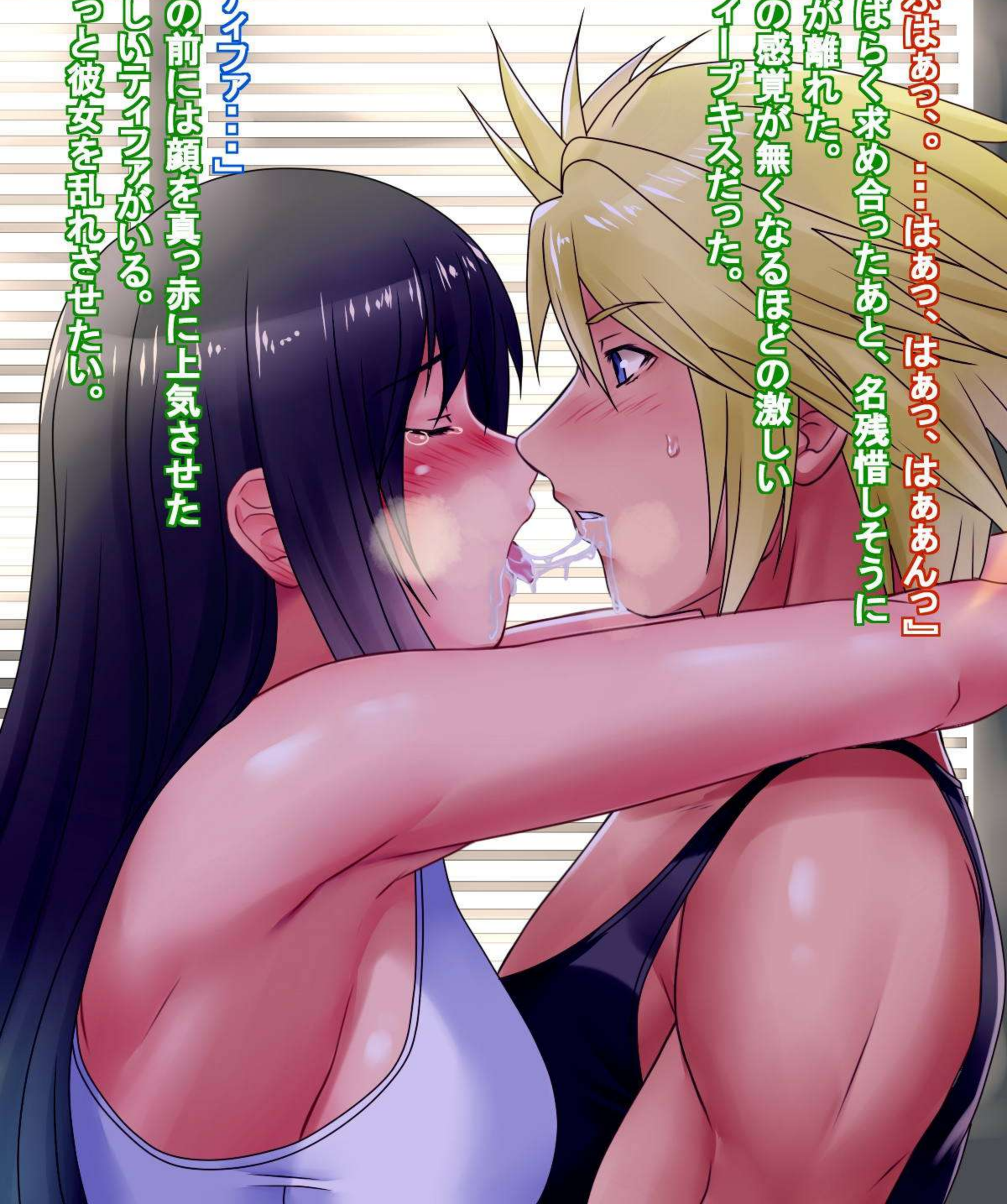
グイグイと押し付けられる豊満な胸。
柔らかい感触と激しい心音が俺を一層興奮させた。
「おっ、おい、ティファアツ！んっ、くっ」
乳首が擦れてきもちがいいのか、ティファアは厭らしくも
ゆさゆさと胸を揺らしている。

『クラウ……ドおっ、んふう、はああッ、—すきい……』
ティファアの目は潤んでとろけていた。

クィクィ

『ぶはあっ。。。はあっ、はあっ、はあっ、はああんっ』
しばらく求め合ったあと、名残惜しそうに
唇が離れた。
唇の感覚が無くなるほどの激しい
ディープキスだった。

「ティファ。。。」
目の前には顔を真っ赤に上気させた
愛しいティファがいる。
もっと彼女を乱れさせたい。



俺はティファアの太腿の間に足を入れ、ぐりぐりと刺激してやった。

『ひゃっ?んっ、クラウド……っ、だめえッ!』

キスの余韻に浸っていたティファアは、突然のことに驚いて身体をピクリと跳ねらせた。

「ティファア、もうおわりなんてこと、ないだろ?」



『あっ、あんツ♥ああ……、はあっ、はあっ』

グイグイとティファアの股間を押せば、
その度に身体がピクついていく。

「ティファア、腰が動いているぞ」

ピクッピクッ

ピクッピクッ

ピクッ

ピクッ

ティファアの腰は、俺の動きに合わせて淫猥に動く。

くねくねと腰を躍らせている様は完全に発情したメスのようだ。

『ああ……、恥ずかしいのに気持ちいいッ……』

服の上から押し付けるだけでは
もどかしいのが、ティンファは物欲しそつに靡らどらぬ。
『んああ……っ、んひら……っ、はあっ、はあっ』

ピクッ
ピクッ

ピクッ
ピクッ

クイツ、クイツ。

上下左右に腰がざらに激しく動く。

そんな顔を見せられては、こっちも堪らない。

「ティファッ！」

我慢できずにティファを抱きしめ、尻をわしづかみにした。

おたくっ♡

「ひゃッ、んああッーだめ……ッ」

そんな厭らしくもみくちやにしちゃ……ッ『っ』

もみゆ、もみゆ。

弾力のある大きな尻を両手いっぱい揉みしだくと

一層大きな声でティファが啼いた。

『やだあ……っ、そんなに激しくしたら……っ！』

んっ、んっ、んっ

クリン

クリン

「可愛い、ティファアツ！もつと感じる……ッ！」

ティファアの股間からむわむわと
熱気がたちこめる。

ただでさえ濡れやすいティファアは、
媚薬のせいで早くもびしょ濡れ
濡らしているようだった。

「んっ、んんッ……感じちやん……ッ、

だめなのに感じちやん……ッ！」

尻を突き出した格好で太腿をもじもじさせて悶えしらる。

ムニムニ♡

ムニムニ♡

俺は耐え切れず、勃起したものを
ティファの太腿に差し込んだ。
むっちりとした肉は湿っていて、
汗と愛液でヌルついている。

『ひゃっああッ?!…く、クラウドッ!
だめッ、んんッ、ああんッ!』

ティファはビクンと反応して、俺を見上げた。
ふるふると首を弱々しく横に振っている。

『ティファがかわいいから…ッ、くっ、もっ」と締める…ッ』
細かく振動させて抜いたり挿したりしてやれば、
分かりやすいほど感じていらした。



きゅっくっくっ！

むちむちの太腿に挟まれる感触に
身震いしてしまっつ。

一生懸命に俺の肉棒に股間を
擦り付けてくるのがいじらしい。

『あひいッ！んっ、んっ、んんッ！これ……っ、
これだめえッ！』

余程気持ちがいいのか、陶酔しきった
ト口顔で必死に腰を動かしては喘いでいる。

きゅっくっくっ！

ビクッ





『ああ……ツッ……これ……ツッ……』

イクラツ、イクラツ……

んんう……ツッ……

ぐちゅぐちゅ。

服の上からなのに、ありえないほどの

ヌルついた水音。

俺の肉棒を締め付けながらあっけなく

ティファは果てた。





『ああ……、そんな……っ！』

へたりこむティファを抱きとめる。

「こんなので終わりじゃない、

まだまだこれからだ」

俺の言葉にティファは

ぶるりと身を震わせた。

ぷん

『あぁんっ、あぁんっ、あぁんっ！』

んんんっ、いったばかりなのになんか……っ！

いっわんっ！

ナイフはわけてもわかんないよ。……っ！

『おっほっ……っ、おっほっ……っ、おっほっ……っ！』

んんん、んんん、んんん！

胸を揉まわるとは……っ！

……っ！

……っ！

俺はナイフの乳首……っ！

んんんっ！

んんんっ！

んんんっ！

ぐわぐわ。くみゆくみゆ。

『あひひひひひッ?!んあッ、んああッ!』

乳首ッ、そんなに強く引っ張っちや……

ああッ!』

ティファは身体を反らせて喘いだ。

ティファの乳首は硬く芯を持っていらん、

強く摘まむ度に

悦ぶよつだった。

ぐわぐわ
ぐわぐわ
ぐわぐわ

くみゆくみゆ

||

くみゆくみゆ

||



「気持ちいいんじゃないのか？ほら、

こんなにビンビンだ」

ティファアに見えるように、ぐいっとうと
引っ張ってやると、ビクビクと身体ごと
跳ねている。

クリクリ。

ひゅく...

ビン

ビン

かみ
かみ
二
二

そのまま苛めてやると
ティファはのけぞった。

『だめっ、だめえッ！
んああッ、何がキモチャッ、ッ
キモチャッのおおッ！』

ムムムム
ムムムム

ムムムム
ムムムム



「媚薬の効果だ、心配しなくっつら」

『乳首だけでぐっちゅちゅたよおっ！』
『…それに母乳なんて……そんな……！』

ア
タ
タ
ア
ア
ア



「ああ、ズボンがびしょびしょじゃないか」

ティファの前に膝をつくと、目の前のホットパンツは色が変わるほどに濡れていた。

太腿は愛液や汗が伝っていてテラテラ光っている。

「や、やだ……っ、見ないでよ……」

手で下半身を隠そうとするティファを制止して、じっくじくと觀賞してやる。



「脱がないと気持ち悪いんじゃないか？」

『ちよっ、ちよっとうっーだめっー！クラウドっ』
スポンのチャックを下して払げると、
真っ白の下着が現れた。

汗びっしよりのティファからは、むわむわと
メスの臭いがする。

『んんっ、やだあ……っ、んっ、くっんっ』



「脱がしてやる。ほら、脚払げて」
ホットパンツに手をかける。

ティファは顔を真っ赤にしながらも、僅かに
脚を開いてくれた。

「んんっ、……んんっ……」

脱がしているだけなのに、ティファは
悩ましい声をあげている。

焦らすように「ゆっくりと」していく。

「あ……、ああ……。んっ……ひゅんっ」



『見られちゃってる……っ、私のびしょびしょの下着』

「ティファ、」「じゅ、すべじゅと濡れている」

ふっ、と秘部のあたりに軽く息を吹きかけてみる。

『んひゃっ!?……ちよと、何して……っ、んんっ』

僅かな刺激でも感じてしまっのか、ティファは

押し殺すようにして喘いだ。

じわりと濡れた部分が更に広がっていく。

クロツチ全体がびしょびしょになっていた。



「じいまできたら、これも脱ぐよな？」

見上げて言っていると、ティファは小さく震えながら俺を見下ろしていた。

『や、やだあ……。もうやだ……。っ、許して……。っ』

ティファの抵抗を無視して、汗でびったり張り付いた白の下着の脇の紐に手を掛けた。

ティファの大事な部分を守っていたはずの白い布は、いとも容易く剥がれていく。



「綺麗なスジが丸見えだ」

下着を取り去ると、ぴゅちりと閉じた秘部が丸見えになっていた。

スジからは愛液が大量に「ほれ」で、膝のあたりまで伝っている。

『はあっ、はあっ』

媚薬の効果は強くなるばかりなのに、俺が全く触ってやらないからか、ティファはまた物欲しげな表情で俺を見ていた。



「足を開いてみる、ほら、早く」
急かすようにティファに言えば、おずおずと
脚を広げ始める。

ぴゅちりと閉じていた陰唇が、少しだけ開いて
堰き止めていた愛液がどろりと「ほれた」。

『はあっ、はああんっ、ああ……っ、見ないで……っ』
見るなという割には従順に脚を広げたままのティファ。

「見られて興奮してるんじゃないのか？」

「……、また濡れてきているじゃないか」

しかし、俺の方もかなり我慢の限界だった。

とび

堪らない。我慢できない。
愛しいティファが目の前で
こんな不埒な格好をしているのだ。
びしょびしょに濡らしたアソコを見せつけるように
俺の目の前で広げて……

あー

「んっ、ちゅっ……ちゅっ」

気が付けば、俺はその聖域にしゃぶっしていらした。

『んあぁッ!?……あぁぁッ、あぁぁッーだめッ、んひいらッー!』

『舐められてる……っ、クラウド! あそこ! 舐めらちゅっしてみるぞっ!』

ちろちろ。ちゅぱちゅぱ。

焦らされていたティファは、少し陰核を

舐められただけで、激しく身体を痙攣させた。

ゼクッ!

ちろ
ちろ
ちろ



『ああああッ！クラクラドッ。』

もっ…私ッ！

あああああッ！

びくんっ。

ティファはまたすぐニイってしまいましたよ。たぶんなった。

ドクドク
ドクドク

ドクドク

「次は俺のを舐めてみる。そう、胸に挟んで……くっ」
今度はティファを跪かせた。

『クラウドの……おっきくなってる……。んっ、はあぁ』
ガチガチに勃起した俺の肉棒を見て、ティファは
息を荒くした。

んちゅ

んちゅ
んちゅ
んちゅ
んちゅ
んちゅ

（今度は私が気持ち良く
してあげる番……っ）

ティファは意を決したように
その小さな口で
俺のモノを咥えた。

「唾液を使って……裏筋を
ゆっくり……っ、そう、
気持ちいいよ、ティファ」

熱い舌がたどたどしく
裏筋や鈴口をなぞっていく。
そのいじらしさにソクソクする。

『んちゅっ、んちゅら……っ、はむっ、ちゅるるっ』
控えめな水音と俺たちの荒い息遣いだけが
部屋に響いている。

「やばい……ッ、出るっ、ティファアー！」
「層強く喉の奥に突き立てると同時に俺は果てた。」

びゅるるるッー！
「んんんんっっーッー！」
ティファの顔や口の中は俺の濃い精液でいっぱいになった。

ビュルルル

とっつあッー！！



大分溜まっていたせいか、
思っていた以上に精液が溢れ出た。
それをティファは喉を鳴らしながら
必死に飲み干そうとしている。
「ぎゅ、ぎゅ」

一通り出しきった後も
ティファは俺の肉棒の先っぽを
ちゅーちゅーと吸い上げて離そうとしない。
「んぶっっ、んべっ、もっっ、もっっ」

びゅるる♡

ブギョ
ブギョ

フェエラをさせた後、ティファは恥ずかしげに
もじもじと太腿を擦り合せていた。
まだ媚薬の効果は治まるといえるか
強まる一方らしく、ティファは珍しくも
積極的にベッドに誘ってきた。

いん
いん

いん
いん



ティファアの部屋に入るやいなや、
 ティファアはベッドにうつ伏せになり
 又レ又レになったアツコを
 見せつけてきたのだ。
 『クラウドお……っ、私
 こんなにちやってるの……っ』

いん
 いん

くぱあ♡

くぱあ♡
 ムンムンとメスのフェロモンが
 漂ってきてクラクラする。
 『欲しい……っ、欲しいの……っ
 ニニ弄って欲しいのッー』



ぬぷるっ……っ!!

あんな風にお願いされては堪らない。

俺は人差し指と中指の二本を

ティファの秘部に一気に突き立てた。

『んひいっ……ッ!!んっ、あああああ……ッ!』

中はびちよびちよに濡れていて、慣らす

必要もなかった。

「もう「んなに呑み込んで……。ガバガバに

なってるぞ!」

第二関節のあたりまでですんなり入ってしまった。

ぬぷるっ……

『あああああッ、気持ちいいッ、あひらッー！
んぐらッ、これしゅいっらッー！』
いつもならこんな卑猥な言葉は言わないだろう。
しかし、あのラブポーションを「一気に
飲み干したティファの頭は
沸騰寸前に達いなく、無理も
なかった。

ゼクン

くっくっくっ
くっくっくっ
くっくっくっ

今、ティファの頭にあるのは、
気持ち良くなりたいたいという「とだけだろう。
『ふーッッ、ふーッッ！んっ、んぐらッー！』

どうにかして快感を逃がそうとするものの、敏感な
身体には抗えず、情けない喘ぎを漏らしていった。

指を入れたただけで身体を

くねくねと動かして、乱れるティファ。

俺は意地悪くも、予告なく

挿れていた指先を激しく動かした。

『あああああッ!!んひいッ!』

あつ、あああッ!だめッ、それだめえッ!』

中がうねって、俺の指を離すまいと締め付ける。

「気持ちいいんだろ?」こんなに締め付けて……ッ」

手の甲にまで愛液が流れてくる。

ティファのあまりの厭らしさに、俺もまた硬く勃起し始めた。

ズリッ
ズリッ



ゼクモン

『ああッ、イクッ！またイツちやうよおおッ！
激しくしちゃっ……ッ、ナカはダメッ、
ああああッー！……』

『おかしくなっちやてるッ、身体が熱くて
堪らないのー！イキたいツクラウドに
イカされたいッー！』

ジュジュ
ジュジュ
ジュジュ

ジュジュ



『あああああああ〜〜ツツ!!』

ティファはのけ反りながら、
勢いよく潮をぶらしていった。

チッ
チッ
チッ
チッ
チッ



ゼクン
ゼクン

『はあっ、はああ……ッ！』

『……ッはああッ、んはあッ』

ティファは口を半開きにさせながら
絶頂の余韻に浸っている。

「ふっん、嫌なんだ？」

そう言っって俺は意地悪に
ティファの秘部からソレを離す。

『あ……ッ、ああ……ッ、や、やだ……ッ』

予想通り、ティファは切なそうに
腰を動かして「ちちを上目遣いに
見てくる。

「素直じゃない子にはお仕置きた」

くねくね

ぺちんツッー

俺は自らの肉棒でティファの
敏感な部分めがけて叩いてやった。

『んひゃああああッー……ッあああ

……あッーんああ……ッー』

「欲しいんだろ？素直になつたらどうだった？」

「イイと……るに当たったらしく、ティファは

のけ反って悦んだ。

刺激に反応したのか、また秘部は

厭らしい蜜を垂れ流し始めた。

ぽちぽち……

んんん

んんん

んんん



ティファがあまりにも締め付ける
ものだから、「ちんちんも昇ってきいーん。
「イけッーイけッ」

「んぐっーやあッーやだああッー
だめッ、そんな「しちちあッー
あああッー!!」

快感を迷がそうと悶えるティファを抑え込んで
激しく犯す。

いつもよりキツくきゅんきゅん締め付けてくる。
これだけ淫乱なのに、処女のようにだ。

「んぐっー
だめッ
あああッー!!」

「んぐっー
だめッ
あああッー!!」

「くっ、ティファ、俺もイクッ！出すぞッ！」

「こんなに締め付けられてしまえば、俺も絶頂が近い。」

「入口は包み込むように柔らかくて

暖かいのに、奥は燃えるように

熱くキツキツだ。」

「クララウドッ、クラウドおッ！イクッ！！

私イっちゃっよおおおッ！！」

イクッ
イクッ
イクッ
イクッ

イクッ
イクッ
イクッ
イクッ

ビュルルッ
ビュルルッ

名前まで呼ばれてしまえば

俺ももう限界だ。

ビュルルッ!!

『ひゃあああああああ〜!!』

出てる、ティファアの中に大量に

俺の精液が!

ティファアの中はきゅんきゅんとうなつて

俺の肉棒を痛いほど締め付けて

搾り取られてしまった。

ク
ク
ク

ビュルルッ
ビュルルッ
ビュルルッ
ビュルルッ

今度は正常位だ。

ティファアをくぐらせた瞬間を
のしかかえる。

『ティファアのおっ○っ○ッ、早○っ○っ○ッ！』
『おっ○っ○ッ、早○っ○っ○ッ！』

ミ○ッ○ッ……

ティファアの目はハートになっている。
自分で足を開き、挿入を待ち望むように
発情した顔を俺に向けている。

ぬちゅッ♡

亀頭を押し当てると、
ティファは我慢できずに腰を突き出し
自ら挿入した。

ぬちゅッ♡

ずぶぶぶツツ!!

いじらしい姿にまた硬くしてしまっ、
勢いよく挿入した。

『きたああああんツツ! ああツ、
これえツ、これが欲しかったのおおつ!!んああつ!』
ティファは悦び、開いた口からは
だらしなく涎を垂らしている。

「ヒロい顔になっている。もっと感じるッ!」

おっぱい

『ああああッ！ひやああッ！』

……ッ！んんうッ！……ッ

んああ……ッ！』

手前で小刻みに出し入れしたり、

奥まで激しく突いたり。

ティファは生理的な涙をためて、

快感に身悶えている。

ちやっ
ん

『またイクッ！イっちやッ！』

クラウドおッ！ああッ

す！すのきゅんゅん！』

くちゅ

すん

しゅ
ん

しゅ
ん

「イけッ、まただらしなくイかされちまえー！」

くっ中に出してやるッー！」

ドブブッー！ビュルルルッー！

『あああッッー！しゅー！しゅー！』

しゅー！いのおおおッッー！

いっぱいクラウドのちよっただいッー！

ああッー！あひッ、くっくっくッー！』

ビュルルルッー！！

汚い音がして、俺の精液が
ティファアに注がれていく。

この綺麗な身体に俺の浅ましい
液体が入っていき、ティファアはその行為に
絶頂している。

「ティファア！」

俺はティファアを強く抱きしめて、最後の一滴まで
注ぎ込んだ。



『はーッ、はーッーんっ、んぐんぐんっー』

ぬぽおッー！

抜く刺激にも小さく喘ぐティファ。

陰核はむき出しに勃起し、

びくびく震えている。

ぬぽおー！

ゴポオ…

はー

媚薬の効果はまだまだ切れないうつだ。

「まだ足りないのか？…じゃあ脚、開いて」

さっき出し切ったはずの肉棒はもう硬く

なっていた。

俺もティファにキスされたせい、少し

媚薬を飲んでしまったようだ。

ティファは虚ろな目をして「ちらを

見つめている。

いつもは一回でへたばってしまふとも

あるのに、ティファはまだまだ物足りない

ようだった。

とんぱん...

『私……ッ、こんな格好して……ッ！』

ああ、恥ずかしいの……ッ！』

開かれた股からはとろりと精液がこぼれる。

くぱくぱと卑猥に動いている陰唇は

テラテラ光っていて、目が釘付けになる。

『早くラッ、早く挿れて欲しいよおおッ！
んッ、我慢できないいいッ』

ティファは俺の肉棒を見つめて腰を振っている。

挿れてやらなければ、今にも
自慰を始めそうだった。

しゅわ、

くわ、



『んんんんっ、欲しいッ
クラウドのが欲しいッッッッッ！』

「じゃあ、俺の気をもちよぐせられたいならな」
俺はティファの目の前に
勃起したモノを突きつけた。

『すっぴんのおっきい……♡これが私の
中に入ってたんだ……』

うっとりとした恍惚の表情を浮かべるティファ。
はじめはちろちろと舐めるだけだったが、すぐに
大胆になっていく。

知知

んちゅっ、んちゅっ、んちゅっ……
はあっ

んちゅっ、んちゅっ、んちゅっ……
はあっ

ンプシュー!

軽くティファの頭を押さえれば、ティファは抵抗なく俺のモノを啜えこんだ。

『おっきいッ、んちゅっ、んぶぶッ』

唾液を舌に絡めて、亀頭を丁寧に刺激してくれる。

んちゅっ

「気持ちいいよ、もっと激しくっつてな」

じゅるるるッー!

先走りや残っていた精液まで
吸い出せる。

ゴキゴキッ

ゴキゴキッ

ゴキッ

「ゴキッ、それやばい……ッー!」

舌が裏筋を乱暴になぞり始める。

「んッ、これ気持ちいい?」

「はあッ、はあッ、んちゅっ、んちゅっ、んちゅっ……ッー!」

じゅるるる〜ッ！
じゅぽっ、ぬぽッ！
挿入時のような卑猥な音。
必死に俺に奉仕しているティファが
愛おしい。

「ティファマジ、あぁッ、くっっー」
情けない声が漏れてしまっまっまっ
強烈なフェラだった。

じゅるるる
じゅぽっ
ぬぽッ



俺はティファの頭を掴み、腰を前後に動かした。『おま』喉の奥に押し込んで、先端を擦り付ける。

ヌルヌルと摩擦し、目がチカチカするほどの快感に襲われる。

『んぐっ、んぐっ、んぐっ！ああッ！』

『んっ、んひいらっしーくるし……ッ』

痛みから逃れようとするティファを抑え込み、無理やり押し付ける。

いっほ
いっほ
いっほ
いっほ
いっほ
いっほ



「くっ、我慢できねえッ！」

絶頂が近づき、俺はティファアを押し倒した。
脚を大きく広げようとするとティファアは羞恥に
苛まれたのか、脚をバタつかせて暴れた。

しかし、その抵抗も虚しく、ティファアはぐちよぐちよ
興奮した秘部を見せつける浅ましい格好になった。

『や、やだあッ、「」の格好やだああッ!!』

いっ

いっ

秘部は情けないほどびちよびちよ「濡れろ」
次から次へと愛液が溢れてくる。

『あひっ、やだあっ、「」の格好ためええっ！
んっ、んぐんぐんっ！』

「ドクンドクン！」
ティファは止められない快感「どくん」を
できず、衰れに痙攣していた。

ドクン
ドクン
ドクン
ドクン
ドクン

「欲しかったんだよな?」

ぎちっ。

開き切った秘部とは違い、きっちり締められたアナルに
亀頭を押し込んでいく。

『あああッ?!...ッちがっぞっちちは...ッッッ!!』

ぎゅっ...

『もしかして...ッ、お尻に...ッ?!』

キツキツのアナルは侵入者を排除しようとして、俺の肉棒を
必死に押し返してくる。

しかし、逆に抑え込んだティファをずり下ろしていけば
虚しくもずぶずぶと挿入されていく。

ぬぽっ、ずるっ、ジ

ニじ開けるように「抜き差し」を繰り返すと
ティファは足先まで震わせている。

お風呂
ポロポロ

ユルユル

ユルユル



ビクッ
ビクッ
ビクッ

『おもしろしみちややだあああああッッッ!!んんんあッッ
あひいっーくううっっッ』

『おもしろいするの気持ちさらさらのおおッッッ!!んんんあッッッ!!
あひいっーくううっっッ』

秘部を押さえてなんとか止めようとするも、気持ち良すぎて
身体が動かないようだ。

ビクッ
ビクッ
ビクッ

アッ

アッ

アッ

アッ

アッ

アッ
アッ
アッ

アッ
アッ
アッ



媚薬の効果が治まってきた頃、

ティファはムツとした表情で俺を睨みつけてきた。

『もっ…もっ…ッ、クラウドッ！』

媚薬を使うなんてサイテーっ！』

ムツ

「まあ、そっ怒るなよ。実はもっ…っ

プレゼントがあるんだが…」

『クラウドのプレゼントなんて二度と受け取らないからッ！』

ティファはそっ言っってそっほを向いた。



「そっか……俺にしてみればかなり頑張ってる
用意したんだがな」
俺はティファの目の前で小さな箱を
差し出した。

「……」

するとティファはハッとした表情を浮かべ、
『……?……まあかそわの……』





おしまい











ズンズンズンズン

ん...♡

お尻も
もこもこ

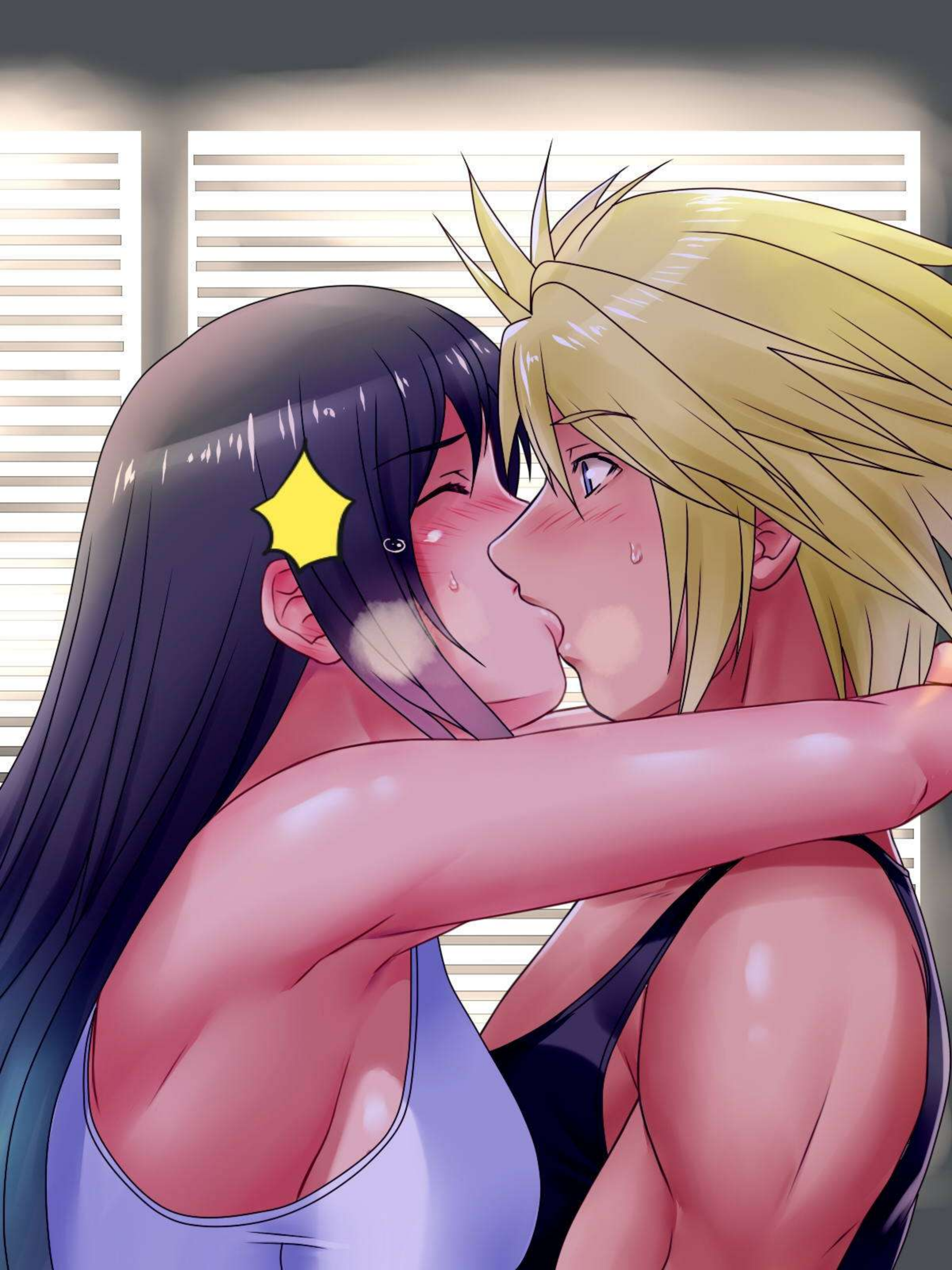








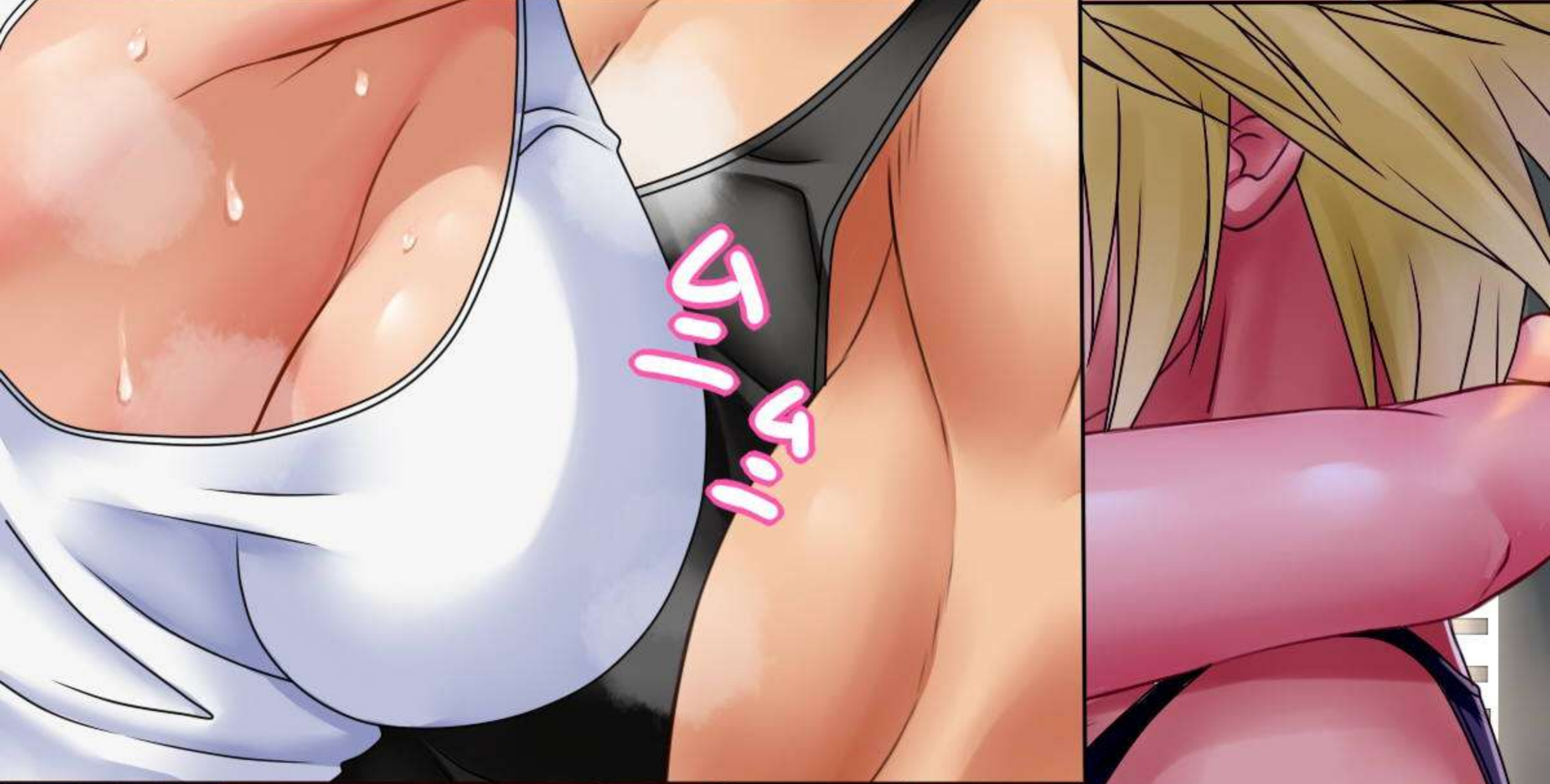


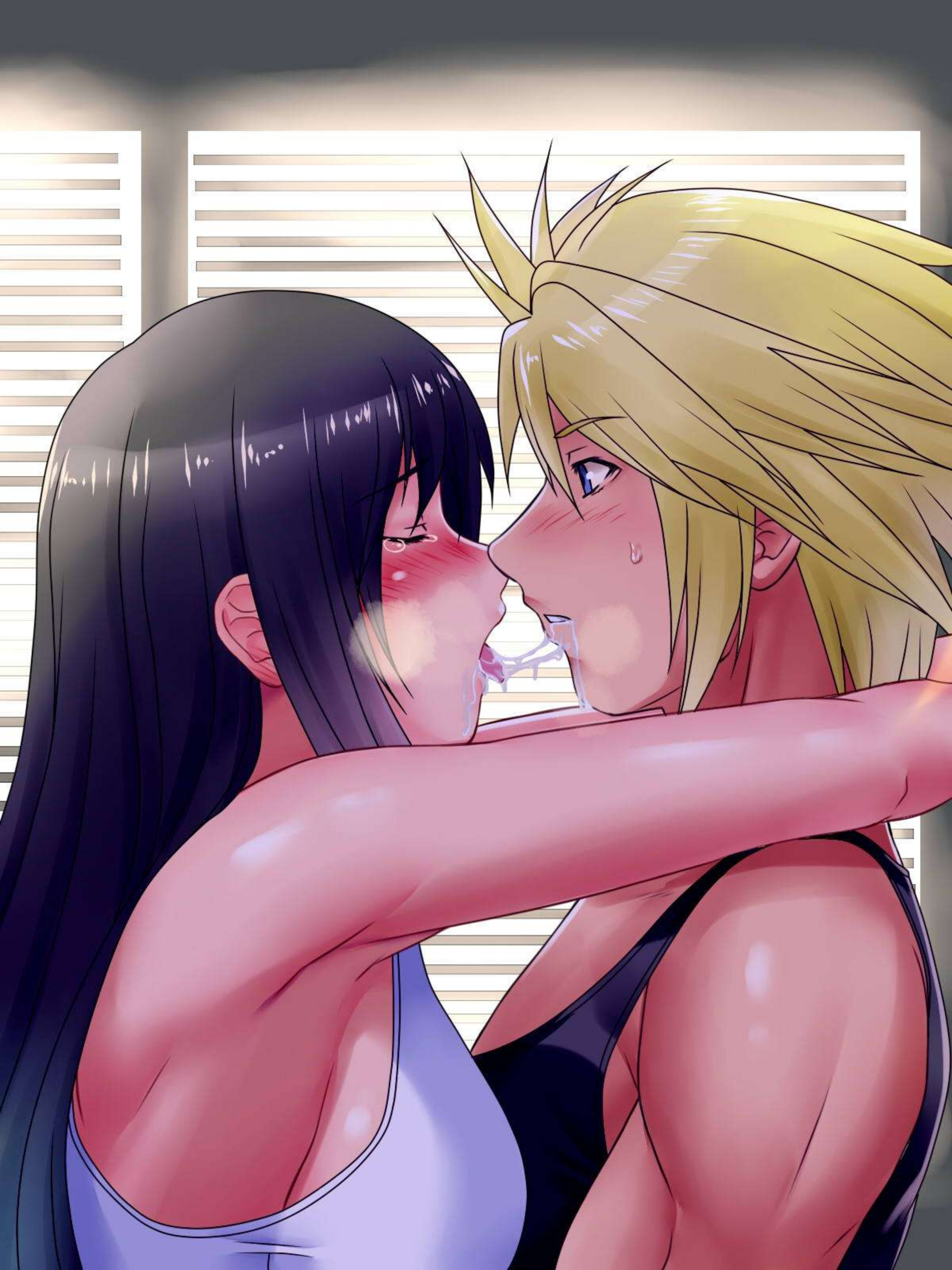




むはあ

おと











はぁ
はぁ
はぁ

はぁ

はぁ

はぁ

はぁ

はぁ



おたくま♡



ヒッ
グイッ

グイッ

グイッ

グイッ



グニョ

ぐにゅ

ぐにゅ



きゅん〜









ジュワッ

ジュワッ

ジュワッ

ジュワッ



やばい
やばい
やばい

やばい
やばい
やばい



ビーン

うわぁ...

ビーン

わぁ

わぁ

わぁ

わぁ



オ
シ
タ
ア
ア
ア















おっぱい





アハハハ
アハハハ

アハハハ



ちゅ

ゴロリッ



女 女 女 女
70 70 70 70



気持ちいい!

ムムムム



びしょ
るる♡

グキョ
グキョ



んん
んん

ぽち♡



7

いん
いん

ぽあ♡



ゼクソ

ふんふん...



ジュジュ

ジュジュ
ジュジュ
ジュジュ
ジュジュ



ピクッ

ゴシヤゴシヤ



ピクピク

ジュジュ
ジュジュ
ジュジュ

ニク









~~~~~

アハハハ  
アハハハ

アハハハ  
アハハハ

ヤスタカ









又キ

又キ



快感



아아아  
아아아  
아아아  
아아아

아아아  
아아아  
아아아  
아아아



アッアッ

アッ

アッ



シロツ...



オッ...



ぬちゅん♡



茶の湯





ちゅ

ぽ

くちゅ

しゅ

ぽ

ぽ

ぽ

しゅ

ぽ

ぽ





は  
は

ぬ  
ぽ  
おー

ゴ  
ポ  
オ



んんん...  
→





くちゅ

くちゅ







知知

ぐんぐんおおお...





ジュジュジュ...

ジュジュジュ...

ジュジュジュ...



あふあふあふ

あふあふあふ

あふあふあふ



おはよう

おはよう

おはよう

おはよう

おはよう

おはよう





30分

30分



おっぱい  
おっぱい  
おっぱい  
おっぱい  
おっぱい



アハハ...





あーん  
あーん

あーん  
あーん  
あーん

あーん



あははは  
あははは

水

あはは

あはは

あはは

あはは



女乳

ポロポロ

ニニニ

ニニニ



Whoo Whoo

Pinnova Pinnova

Pinova Pinova Pinova Pinova Pinova



శుభాకాంక్షలు

మీ



カッ  
カッ  
カッ

カッ  
カッ  
カッ

カッ

カッ

カッ

カッ

カッ  
カッ  
カッ

カッ  
カッ  
カッ

カッ  
カッ  
カッ



わんわん  
わんわん

わんわん  
わんわん  
わんわん  
わんわん

わんわん  
わんわん

わんわん  
わんわん

わんわん  
わんわん







